

健康のかけはし

大田病院の「理念」

私たちの病院は
① だれでも安心してかかる病院
② 心の通いあう、あたたかい病院
③ 地域の人々と共に歩む病院
であることをめざします。

No.63

大田病院

〒143-0012 東京都大田区大森東4-4-14

大田病院は基幹型
臨床研修病院です

2019年7月17日

☎ 03-3762-8421 発行責任者 渡邊 峰人



2歳の娘の水いぼで悩んでいます。皮膚科医であっても治療をするべきか悩みます。そこで今回は娘の例をもとに水いぼについて考えてみたいと思います。

① 疾患概念

専門用語では伝染性軟属腫てんせんせいなんぞくしゅと呼びます。伝染性軟属腫ウイルスによる皮膚の感染症で主に幼児・学童が罹患します。皮膚と皮膚の接触で感染します。半年〜2年で免疫力が付き自然に治ります。

娘の皮膚は乾燥しやすく、保湿剤を外用しないとカサカサします。保育園に通っているため他の子どもとの接触があります。

② 症状

表面がツルツルして光沢のある1〜5mm程度の小さな皮膚の盛り上がり（丘疹と言います）で、てっぺんが少し凹んでいるのが特徴です（図1）。水いぼの周りにかゆい湿疹ができて自然に治るときがあります。その反応をモルスクム反応と呼んでいます。

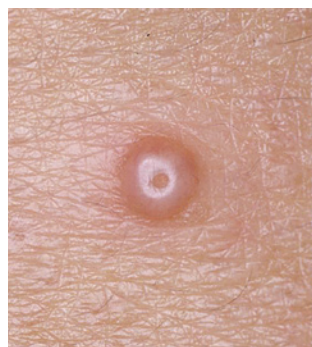


図1 光沢と臍窩のある丘疹

③ 治療

ピンセットで水いぼをつかむとてっぺんの凹んだ部分から白い塊が出てきて取ることができ、これが最も確実な治療法です（図2）。ただし痛みをとるためリドカインテープなどの麻酔薬を用いて緩和します。自然治癒も望めるため、治療しなくてもよく、痛みのある治療を選択するかは皮膚科医の中にも意見がわかれます。数が増え

娘の場合、モルスクム反応と思われる発赤、かゆみを生じ、掻いて周囲の皮膚に感染し、新生を繰り返していました。掻くことで潰れて治るところもありました。



図2 リングセッシ

てしまった場合、湿疹が増悪し伝染性膿痂疹（とびひ）を引き起こしてしまう場合、社会的背景（保育施設への登園、スイミングスクールへの参加の可否）を考慮して治療をするか相談します。

娘の場合、自然に治ることを期待して様子を見ていましたが、掻いてしまうと、治ったと思ったら新しいのができ…常に約10個の水いぼがありました。かゆみがなければこのまま様子をみていようと思っていましたが、毎日見ていると筆者自身も気になってしまったので皮膚科を受診しました。かゆみにステロイド軟膏の外用を行うことになりました。

た。炎症は落ち着き、数日後には掻かなくなりました。とはいえ水いぼは残存しています。保育園のプールが始まることもあり、無理のない範囲で取ってもらおうと決心しました。後日、麻酔薬のテープを貼付し、水いぼを取りに行きました。抵抗するなら取らずに帰ろうと思いましたが、待ち時間に寝てしまい、寝たまま取ることができたので痛みは感じていませんでした。

④ ケアと生活指導

ドライスキンと呼ばれる乾燥肌やアトピー性皮膚炎があると水いぼにかかりやすいです。ウイルスは正常な皮膚には感染しませんが、皮膚の小さな傷があると感染しやすくなります。保湿剤を外用薬によるスキンケアや湿疹の治療を行い、イボができにくい環境作りが必要です。プールに関しては、プールの水では感染しないのでプールに入っても構いませんが、皮膚と皮膚が接触することで感染の機会が増えることは否定できません。ラッシュガードの着用やウォータープールの絆創膏で水いぼを覆うことは感染対

策になります。

娘も皮膚が乾燥しやすいので保湿剤であるヘパリン類似物質ローションの外用を2回/日行っています。保湿するだけでもかゆみは軽減し、外用する際に皮膚の状態を観察することもできるので病状を把握するのに役立っています。

⑤ まゆめ

乾燥肌がある2歳の娘の水いぼで悩んでいました。ステロイド軟膏の外用は感染の懸念もありますが、短期間であれば掻かなくなるので新生の予防になりました。筆者自身、外来診察において、治療に関しては柔軟に対応していました。少ないうちに対応しておけば良かったと思うことや、兄弟がいる場合はうつってしまい二人とも治療が必要になることもありました。娘の水いぼ治療の経験を生かし、これからはさらに、個々の患者さんの状況に応じて治療の選択ができるようにしていきたいです。



放射線課紹介

大田病院の放射線課は、診療放射線技師8名の職場です。男女比50：50です。

業務の内容は、画像撮影を主に担当しています。大田病院では放射線課が担当する画像検査として、胸部レントゲンなどの一般撮影、バリウム検査などの透視撮影（X線TV）、CT、MRI、病棟での撮影（ポータブル撮影）、血管造影などのオペ室での撮影（外科用イメージ撮影）があります。大田病院附属大森中診療所は、一般撮影とCTのほかに、マンモグラフィ、骨密度検査があります。一般撮影装置、マンモグラフィは、以前の装置より少ないX線量で鮮明な画像が得られるものを新しく導入しました。



放射線課が撮影した画像は、読影医の方で結果作成という流れに

なっています。絵は描き手の主観が入り込んで、非現実な世界も描くことができますが、写真は客観的に現実を写し出し撮影者の主観は入りにくいです。X線撮影も同様で客観的な実際の状態の画像を得ることができ、撮影者の主観がほとんど入り込まないため、検査として成り立っています。

検査をオーダーした医師の意図を理解し、わかりやすい画像を撮るということもできる検査もあります。この場合はできるだけそれを心がけて撮影しています。また、重要ですぐに報告しなければいけない画像などの場合は、読影医の結果がでるまで待たず、直接オーダーした医師に連絡をしています。

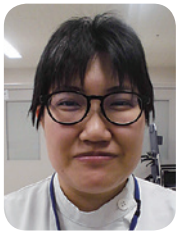
大田区の胃がん検診などの検診を大田病院でも行っています。放射線課ではバリウムでの検査を担当しています。がんには進行がんもありますが、早期がんもあります。症状がなかったり、軽かったりで早期がんが見つかったりすることもあるそうです。早期で、転移していないのであればがんであっても怖くはないと思います。そのような、なおる可能性のある早期のがんを見つけることも大事な仕事と思っています（検診についての詳細は大森中診療所の健診センターにお問い合わせください）。

（放射線課 平澤）

（放射線課 平澤）



リハビリテーション科 作業療法士 大上 歩波



大田病院に入職して5年目になり、今年は新人教育を担当しています。私が入職した理由は、命は平等という理念に共感を得たからです。私が印象に残った患者さまは、ホームレスの方でした。路上で倒れ、当院に救急搬送され治療を受け、その中でリハビリをして一人で歩けるようになるまで回復しました。

しかし、退院先がなくMSWの方が施設を探して下さり、退院して施設に入所しました。リハビリをして動けるようになって退院先がなければ、またその方は路上で倒れてしまう可能性もあったと思います。患者さまは、お一人おひとり、いろいろな背景を持っています。さまざまな背景に合わせてしっかりサポートするのが医民連、大田病院の役目だと思います。

今後も患者さまの背景を考え他職種と連携して、より良い医療を行えたらと思います。次回は同じくリハビリテーション科理学療法士・岸岳志さんです。



「第1回摂食嚥下セミナー」を開催

6月22日「2019年度第1回摂食嚥下セミナー」を開催しました。当院で積極的に実施している嚥下リハビリ手法の完全側臥位法を地域の方々にも広めることを目的としています。今回リハビリテーション科牧上医師による「誤嚥性肺炎」何が起きているのか？ どう対応するか？ 「内視鏡でみたセカイ」と「完全側臥位法を介助する・される側の体験」をしました。参加された方には大変好評で意見交換も活発でした。次回開催は12月に予定しています。